HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「意味空間」としての場の発展論理
Author(s)	宮崎, 隆志
Citation	社会教育研究, 31, 1-9
Issue Date	2013-04-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55105
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00231372_31_02.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「意味空間」としての場の発展論理

宮　崎　隆　志*

目　　次

１．問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
２．試金石としてのデカルト批判・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　⑴　デカルト的問題構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　⑵　コミュニティに埋め込まれた精神・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　⑶　生態学的システム論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
３．ダブル・バインド論の可能性と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　⑴　ダブル・バインドと意味空間の変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　⑵　活動およびシステムの二重性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
４．二重の社会空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
５．結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

１．問題の所在

形成論を空間論として展開する必要性に関しては、すでに「自己形成空間」(高橋勝)や「人間形成空間」(堀内守)などの先駆的な提起がなされてきた。例えば高橋によれば、自己形成空間とは「子どもが、さまざまな他者・自然・事物と＜かかわりあう＞なかで徐々に形成されてくる意味空間であり、相互に交流しあう舞台」[1]である。このようなカテゴリーの導入によって、形成作用の統御としての教育論(宮原誠一)を形成空間のコーディネート論として展開する可能性が得られるであろう。

小論では、形成空間論に迫るための理論的なフレームについての仮説を提起することを目的としている。その際の留意点は次の二点である。

第一は、形成空間をさしあたりは「意味空間」[2]、すなわち意味が生成する空間として、人間形成や自己形成との関連よりも広くとらえることである。自己形成は空間内の諸規定性を主体的に統合することによって可能になる。宮原の形成論を空間論として展開するにはこの点は最も重要なポイン

*教育学研究院教授

トであるが、主体的統合という課題は複雑すぎるため[3]、ここではひとまず、より基礎的なカテゴリーである意味という次元に限定して、空間論への展開の課題を探りたい。それ故、小論は形成空間論に向けた予備的考察に留まる。

第二に、宮原の形成概念がプラス・マイナスの作用を含んでいたように、ここでの形成空間も様々な価値を含んで成立するものとして検討する。先述の高橋は、夜間定時制高校の保健室やひきこもり状態にある若者の居場所としてのコミュニティ・カフェを例示し、自己形成空間を共同体の絆を弱体化させ諸個人のアトム化を進める現代社会に抗して構築すべきものとして位置づけている。つまり、ここでは自己形成空間は既に肯定的な価値を有するものとして措定されている。一般に居場所としての空間構築を追求する実践も、このような理解を共有している[4]。しかし、そのように措定された空間はすでに統御された空間である。その空間の意義を問うことはもとより重要であるが、小論ではむしろ、統御の対象となる空間の変動論理に着目する。その次元の把握なしには統御の課題と方法も見出せないと考えるからである。このことはまた、宮原の形成概念に基づく空間把握の必然的帰結でもある。

小論の課題は以下のように限定する。第一に、意味の生成空間を把握するための方法的な枠組みについて検討する。意味の生成はコンテクストの生成と同義であるから、それは経験が構成され、さらに種々の経験が一つの物語として文脈化され編集されていく場の把握方法を問うことになる。第二に、形成空間の統御論としての教育論を展開するためには、この空間自体の変容の論理を把握することが不可欠である。この点についても、現段階では第一課題のコンテクスト生成の論理に即して、その変容の論理を確認するにとどまるが、そこから空間変容論へと展開するための検討課題については試論的に提起したい。

以下では、空間論が要請される背景をデカルト批判として確認し、そこから導かれる対案としてのシステム論的理解の特徴を要約する。そのうえで、システム変容の論理の到達点を検討し、空間変容の論理の把握のための理論的課題についても言及する。

2．試金石としてのデカルト批判

(1) デカルト的問題構成

空間や場に着目する論者はいずれも、デカルト批判を出発点に置いている。周知のようにデカルトは、精神と物質という二つの実体が存在することを主張し（二元論）、方法的懐疑によって思惟する私の存在のみを確実に知りえることを認めた（超越論的自我）。思惟する主体としての私の思惟が構成する観念つまり知の真実性が、神によって保障されていることを証明した上で、今度は逆に精神なき物質世界としての空間は数学的・機械論的な合理的法則が支配する世界として体系的に把握できるとした。

Ⅰ:「いささかでも疑わしいところがあると思われそうなものはすべて絶対的に虚偽なものとしてこれを斥けてゆき、かくて結局において疑うべからざるものが私の確信のうちには残らぬであろうか、これを見届けなければならぬと私は考えた。…(中略)…かつて私の心のうちにはいって来た一切のものは夢に見る幻影とひとしく虚偽であると仮定しようと決心した。けれどもそう決心するや否や、私がそんなふうに一切を虚偽であると考えようと欲するかぎり、そのように考えている「私」は必然的に何ものかであらねばならぬことに気づいた。…(中略)…私とは何であるかを注意ぶかく検査し、何らの身体をも私が持たぬと仮想することができ、また私がその中で存在する何らの世界も、何らの場処もないと仮想することはできるが、そうだからといって私が全く存在せぬと仮想することはできないこと…(中略)…私というものは一つの実体であって、この実体の本質または本性とは、考えるということだけである。そうして、かかる実体の存在するためには、何らの場処をも必要とせぬし何らの物質的なものにも依存せぬものであることを、したがってこの「私」なるもの、すなわち私をして私ならしめるところの精神は身体とは全く別箇のものであり、…(後略)」[5]

機械論的な法則性理解は、要素の集合と相互関連というアトミスティックな分析フレームを必然的に伴う。また小論の課題に引き付けると、自己を支える精神性は空間には存在せず、逆に、精神性なき世界としての空間は自己との連続性を持たない対象であった。ここからいわゆる近代的主体の概念、あるいは経験や状況から遊離した学習・教育論も導かれる。

(2) コミュニティに埋め込まれた精神

教育学に限らず、科学主義や技術的合理性の限界が意識されるに及んで、デカルト的問題構成そのものを批判するという問題意識が生じてくるのは必然的である。焦点は思惟する私と空間との関連性の把握及び知の確実性の保障方法にある。しかし、問題はその批判の方法にあり、それにより論者の理論的立場は分岐することになる。

例えば、クリークは個人間の関係として教育を理解することを批判し、共同体(コミュニティ)に埋め込まれた民族精神が個人の形成の全過程に作用することを強調する。「共同体における凡ゆる精神的作用―それは共同体成員たちの成長における構成要素となる」[6]のであり、自己は我―汝の相互作用により構築されるものの(Ⅱ)、言語発達に典型的なように、その自発性をとおして共同社会の内面的形式が獲得される(Ⅲ)。その内面形式には民族としての精神性が内在化されていると言う(Ⅳ)。

Ⅱ:「影の如く浮動し、形をもたず流動する新生児の意識の中へ汝が―恐らく母という汝が―最初の有形の形態として入り、法則及び形態を与えながら、意識全体を形成し、意識の領域内のあらゆる個々の形成物をつくり出すように作用するのである。汝は一方では自発的な活動なり成長なりを

刺激し、また同時に他方では固定的な制度及び規範を立てる。そして此の両者から意識全体並びに個々の内容の形態が出来し、ついに最後の所産として自己意識が生ける汝の対極としての我が出現するのである。」[7]

Ⅲ:「子供の発達に於て決定的な意義を有するものは言語であるが、言語は自然な仕方で表現身振から衝動的に発展すると同時にまた―客観的な言語形式として、又具体的な母国語として―共同社会から子供の中へ這入って行くものである。が、夫れは凡ての自発的な表現活動が共同社会の規範に従って形づくられ指導されるからである」[8]

Ⅳ:「我と汝との間の相互の影響は、両者が一の共通の、優位におかれた生活圏の中に入れられて居ることによって可能である。そしてその共通の、優位に置かれた生活圏の中に於て、人間の種族の本質は民族または社会として実現されるのである」[9]

このように、クリークの主張の要点は、コミュニティの再生産における個人の自発性や諸個人間の相互作用を位置づけつつ、同時にその過程を通して精神性の分有ないし遍在化が進展し、逆にそれが達成される場合にのみ社会の一員としての成長が可能になるという点にある。この主張がデカルト的問題構成の転換にあたることは言うまでもない。このような論理は、空間論として参照される日本思想・東洋思想の紹介の仕方、あるいは一部のコミュニタリアンにおいても見出すことができる。

しかし、この論理は、個人と社会の予定調和的関係とそれらを包括する普遍的精神を神秘化している。すなわち普遍的精神や規範の質的変化を含む生成・発展の論理を欠落させており、それ故に無概念的でトートロジカルな論理構成に陥ることは免れない。

(3) 生態学的システム論

デカルトの問題構成を転換するもう一つの潮流として生態学的システム論を挙げておこう。ここではギブソンとベイトソンを取り上げ、両者に共通する論理について包括的かつ結論的に言及する。

このアプローチの特徴は、第一に、対象を知るという行為を対象と自己（知る主体）とを包括するシステムの中で進行する過程として把握する点にある。言い換えれば、分析単位は要素的な刺激を受容する個人ではなく、知覚システムである。ギブソンによれば、自己を知覚する情報と環境を知覚する情報は同一である。すなわち、「主体と客体は領域が異なるものと考えられているが、実際にはそれはただ注意の両極に過ぎない。観察者と環境を分ける二元論は不必要であり、「ここ」の知覚が成立するための情報は「あそこ」の知覚に対する情報と同じ種類のものである。」[10]

第二に、システムを作動させる上で重要な要素は、物理的な刺激ではなく情報である。ここでいう情報は価値や意味を含み、その価値や意味に基づいてシステムが統御される。ギブソンの場合は、アフォーダンスに関する情報が重視されている。アフォーダンスとは、「環境が動物に提供するもの、

良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりするもの」[11]であり、環境と動物の両者に関連する相補性の中にある価値や意味である。他方、ベイトソンは、ある変化（A→A'）が意味するものが情報であること[12]、そしてそれを伝えるためにはメタコミュニケーションの存在が条件となることを指摘している。

V：「すでに私はコード化の話の中で、どんな状況下でも、メッセージを引き起こす出来事はメッセージ自体と異なる、と述べた。メッセージとそれが表す事柄との間には、予測可能な部分をもった、ある程度は規則的な関係がある。だがその関係は決して直接的でも単純なものでもないのであり、B がA の「示し」に対して応じるためには、それの意味するところがわかる、ということが絶対に必要である。ということは、A からのメッセージないし「示し」がどのようにコード化されているかを B に伝える別のクラスの情報が存在し、それを B が活用できるようになっていなくてはならないということだ」[13]

第三に、情報を介するシステムの変動は、精神活動である。「生きた世界」を「結ばれあうパターン」（『精神と自然』p9）として特徴づけるベイトソンは、相互に作用するパターン（部分）としてのシステムを精神と呼ぶ。知覚システムであれ、サイバネティクスであれ、調整器つきの蒸気機関であれ、「システム内のどの地点で起こる出来事も、その結果が一巡りして、最初の地点での変化を起こしうる」という「自己修復の働きを行う因果関係の回路」（同上）は精神である。したがって、精神は人間の自己の内部というよりも、それをも含むシステム次元に存在することになる。

第四に、システムは通常は安定性を保つが、それは不断に変化することによってである。このような運動性を持つことが精神の特徴であり、知覚もこの変化の中の安定を抽出することによって成立する。ギブソンは、「知覚者は流動に注意しながら、刺激作用の流動から不変の構造の不変項を抽出する」[14]と指摘しているが、逆にいえば、変化や流動性のないところでは、知覚は成立しない。システム自体が持続と変化を検出することがシステムの存続条件である。ベイトソンは、同様の指摘をストカスティックな連続、つまり出来事の連続がランダムな要素と選択的プロセスの両方を兼ね備え、ランダムに起こった結果の一部しか存続を許さないような連続に着目して行っている。ここで、ランダムは多様性や不連続、変化を意味し、選択は同一性、連続性を意味する。進化論に即した説明においては、ジェネティック（発生的）なレベルでは、ランダムな変化が生じても「逸脱者排除の検閲」によって画一的保守主義の勝利が展開するが、外界への適応では、表現型（体細胞的レベルにおける生物）と環境とを一つのシステムとして見るときには、「どちらも、互いが次にどう動くのかについて情報は持ち合わせていない」という予測不可能性がそこに生ずる。これが変化を提案し、その提案された変化が、遺伝的状況によってあるものは認められ、あるものは禁じられるという形で処理されると説明している（VI）。

VI :「要約すれば、表現型と環境とのコンビネーションによって第二のストカスティック・システムのランダムな構成要素ができ、それが変化を提案 propose し、その提案された変化を遺伝的状況が―あるものは認め、あるものは禁ずるという形で―処理 dispose すると言える」[15]

つまり、内部でも不断に多様性・不連続性は生じているが、同一性保持のための選択作用が強く働く。他方、外界への適応局面でもランダムな変化が生じるが、それが内的な条件によって規制され選択されるという形で、適応としての変化が生ずる。このようなストカスティック・プロセスは思考過程においても同様に成立しているとベイトソンはいう。要点は変化しつつ安定する流動性にある。

以上のように、生態学的システム論は、クリークと同じく精神の遍在性や自己と対象（社会）の同時成立を主張するものの、それは不断の変化の中での安定として、であり、変化に関する情報を抽出し自己回復するという、運動性によって保障されている。クリークがコミュニティに閉じたシステムを描いたとすれば、ここでは対照的に運動性がシステムを開く可能性を与えている。

３．ダブル・バインド論の可能性と課題

(1) ダブル・バインドと意味空間の変容

これを開放的システムの必要条件とすれば、十分条件は、ベイトソンによればダブルバインドである。ダブルバインドとは、相反する禁止命令が同時に発せられそれを回避することができない状況をさすが、それはベイトソンのいう論理階型を飛び越すことによって、言い換えればあるレベルでの決定にのみあずかるべき情報を、別のレベルに流用することによって生じる。命名することは、ある事物を記号化することであるから、その記号の意味を成立させるコンテクスト（メタコンテクスト）が、事物の存在に即して成立するコンテクストとは別次元で成立しなければならない。その両者が混在するときに、相反するメッセージが同時に存在するダブルバインドが生ずる[16]。

これによって生態学的システムは、単なる循環的な回帰システムではなく、循環システムそのものを創発（emerge）するシステム、つまり学習するシステムとして動態的に把握することが可能になった。暗黙化されていたシステム、あるいはそれを支えていたコンテクストが再構築されることは、コンテクストのコンテクストが転換することを意味する。対話による意味構成を例にとれば、対話のモードが変化することによる意味変容といってよい。意味の生成空間の質的転換は、この変化と密接に関わっている。

(2) 活動およびシステムの二重性

しかし、ベイトソンはダブル・バインドの論理構造は指摘するものの、そのような事態が発生す

る機序は問うていない。論理階型の飛び越しがなぜ生ずるのか、その必然性を明らかにしなければ、ダブル・バインド論は現象を事後的に説明する道具にしかならない。

この点に迫るには、ヘーゲルの自己意識論を批判したマルクスの労働論・疎外論[17]に遡らねばならない。『経哲草稿』第三草稿においてマルクスは、主客二元論の突破を宣言するヘーゲル『精神現象学』自己意識論に対する根本的な批判を展開している。まずヘーゲルの構想を確認しておこう（Ⅶ）。

Ⅶ：「彩りゆたかな感覚的此岸と空虚な夜に沈む超感覚的な彼岸という二元的世界をぬけだして、白昼に展開する精神の現在へと足を踏み入れるのだ」[18]（『精神現象学』）

ヘーゲルは、経験のうちにそのまま現れる対象を確信するという構図で真理性を探求する意識は二元的世界に留まり、その確信が真理たる保障はどこにあるのかという知の確実性問題に回答できないという。ヘーゲルによる突破策は、確信している意識そのものを対象に設定することであった。このように対象が経験的世界から意識に転換され、意識間の関係に閉じて知の確実性あるいは真理性探究の土俵が再設定されるのが、自己意識論である。その結果、意識間の対立は高次の自己媒介運動である精神のモメントとされることによって、統一される。精神は意識や対象的世界の区別なく浸透し、精神のシステムとしての全体性を獲得し、そのことによって知の確実性を保障する。

このようなヘーゲルの論理構成に対し、マルクスは、真理性問題が意識の自己運動という形式に転換された結果、「もはや外へではなく、やはりただ自分自身のなかだけへと進んでゆく抽象的思惟の運動が、成果として登場する」と批判する[19]。その帰結が絶対知であった。システムの流動性はここに終結させられる。

それに対しマルクスは、労働という活動がシステム形成の要に位置すると主張する。ヘーゲルの自己意識に労働を対置したといってもよい[20]。対象的世界は労働、より一般的には人間の活動に媒介されることによって、人間の文化が内在する世界となる。それ故に、対象認識の可能性が与えられ、同時に対象の内に対象化された自己を見出し、自己を確証することが可能である。非有機的自然が非有機的身体に転化するというマルクスの指摘は、環境と人間のシステム的連関を意味しているが、そのシステム形成の根拠は意識でも精神でもなく活動（労働）である。環境の有するアフォーダンスの根拠はここにあると言ってよいであろう。活動の媒介性が、主客のシステム的連関を成立させていることが要点である。

他方、人間の活動は「生活を創り出す生活」[21]として特徴づけられるように、個別的でありながら同時に普遍的な意味づけを行いつつ展開する。ベイトソンのいうメタコンテクストを意識化しつつなされると言ってもよいであろう。それは自由な活動の根拠であると同時に、逆に、コンテクストとメタコンテクストを転倒させた活動（＝疎外された労働）を成立させる根拠にもなる。その結果、労働のシステムは同時に資本のシステムという転倒的なシステムとしても実現する。それ故に、シス

テムは二重になり、環境も二重のメッセージを含んで成立する。ダブルバインドは、このようにして産出されるシステムや場そのものの二重性に起因すると見るべきであろう。

４．二重の社会空間

以上の理解に基づけば、システム変容の可能性と必然性は、システムそのものというよりも、システム構成の主体とその活動に内在する矛盾と一体的に把握されねばならない。同時に、活動のシステムとして敷衍することによって、逆にシステム次元の変容によって主体の変容が生ずる可能性と論理をも与えることになる。コミュニティ・エンパワメントの存立次元もここに見出せる。

このようなシステム変容の分析の焦点になるのは、ハビトゥス（≒スキーマ）である。社会空間における闘争とその結果としての差異化が、社会的なクラスに固有のハビトゥスを規定するが、ハビトゥスは同時に「統一性と全体性としての生の日常的経験」[22]を可能にするもの、つまり自己物語の編集論理（＝スキーマ）でもあるからである。ベイトソンはコンテクストのコンテクストを論理階型として区別し、その変容を学習の階型的な展開に即して説明したが、例えばイルカと人間の学習が同一論理次元で扱われることに示されるように抽象度が高い。社会的な構造の中で諸論理階型を区別しつつ、特にメタコミュニケーションのありかたを規定するコンテクストの変容を具体的に分析するには論理的な媒介項が必要であろう。ブルデューの社会空間およびハビトゥス論は、その有力な候補であるが、ブルデューにおいては界の変容は、「潜在的な力と顕在的な力からなる力の場」における闘争として説明されている[23]。力関係が現実的な規定性を有することは言うまでもないが、力学的モデルは現象論に留まる。いかなる力がどのように生じるのかを説明することが、社会空間の変容の論理を解明する上で不可欠であろう。マルクスに媒介されたダブル・バインド論に基づけば、社会空間の二重構造論を展開することが可能であるように思われる。この点は今後の課題としたい。

５．結　論

意味の生成空間は労働（＝活動）によって精神性を有する空間として成立する。デカルトが模索した思惟と存在の統一（知の確実性）の根拠はここに与えられる。同時に、活動の転倒性（有限性）によって、その空間はダブル・バインドを不断に発生させるが、それが場の発展の原動力となる。形成作用の統御は、このような空間への介入（＝再編集：コミュニティ・エンパワメント）として構想可能である。

[1] 高橋勝（1992）『子どもの自己形成空間』川島書店、p.8
[2] 高橋は「意味で彩られた象徴的空間」として「意味空間」を実践している。小論はそれに示唆を受けつつも、暫定的に意味が生成する空間として、それを理解する。高橋勝（1997）『学校のパラダイム転換』、川島書店、pp.22～25
[3] 例えばブルデューに即せば、社会空間の構造と諸資本の量と構成を考慮して得られるハビトゥスに加えて、実践のモメントを視野に入れなければ、自己形成を議論することはできない。他方、実践とハビトゥスの相互規定性を考える際には、コミュニティ概念も不可欠となる。後者に関わる試論的な検討として、宮﨑隆志・日置真世（2010）「地域生活支援による自己構造の発展論理」『子ども発達臨床研究』第 4 号
[4] 例えば、田中治彦編著（2011）『子ども・若者の自己形成空間』東洋館出版社
[5] デカルト（落合太郎訳　1637=1953）『方法序説』岩波文庫、pp.44～46
[6] クリーク（野上巌訳　1940＝1943）『全体主義教育原理』栗田書店、p.25
[7] クリーク（稲富栄次郎・佐藤正夫　1930＝1942）『教育哲学』育芳社、p.42
[8] 同上、p.44
[9] 同上、p.38
[10] J.J.ギブソン（古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻 共訳　1979=1985）『生態学的視覚論』サイエンス社、p.126
[11] 同上、p.149
[12] 「『情報』という語を簡潔に、『のちの出来事に違いを生むあらゆる違い』として定義することができる」、G.ベイトソン（佐藤良明訳 1972=2000）『精神の生態学』p.507
[13] G.ベイトソン（佐藤良明訳 1979=2006）『精神と自然』新思索社、p.150
[14] ギブソン、同上、p.262
[15] ベイトソン（1979）、p.244
[16] ベイトソンは論理階型の混同の一例として「クレタ人のエピメニデスが言った。『すべてのクレタ人は嘘つきだ』」というパラドクスを挙げている。同上、p.158
[17] この理解については有井行夫（1987）『マルクスの社会システム理論』有斐閣を参照。また拙稿（2012）「経哲草稿における人間存在論」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 117 号も参照して頂ければ幸いである。
[18] G.W.F.ヘーゲル（長谷川宏訳 1832＝1998）『精神現象学』作品社、p.128
[19] K.マルクス（城塚登・田中吉六訳 1884＝1964）『経済学・哲学草稿』岩波文庫、P.198
[20] 有井、前掲書。
[21] マルクス、前掲書、P.95
[22] P.ブルデュー（加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳　1994=2007）『実践理性』藤原書店、P.104
[23] P.ブルデュー&L.ヴァカン（水島和則訳 1992=2007）、『リフレクシブ・ソシオロジー』藤原書店、P.137

※小論は 2011 年に開催された日本社会教育学会にて発表した内容に加筆したものである。